



るために、木の役割が大変重要になってくるということを知りました。

副読本「校庭の木を調べよう」の項を使い、「校庭に生えている木を使って、その木がどのくらいの二酸化炭素を蓄えているか調べましょう。そして、1年間、みんなが生活すると、調べた木が何本必要になるかも考えましょう。」と課題提示をしました。そして、校庭へ出て各班毎に、木の幹の周囲の長さを図り、再び教室へ戻り、測定した木に蓄えられている二酸化炭素量を算出しました。そして、1人の日本人がくらしの中で排出する二酸化炭素量から、自分の1年間のくらしを支えるには、今測定した木が何本必要かを計算し、発表しました。

発表後、講師から、1人の1年間のくらしに必要な木の本数が分かったけれど、その木が今の状態に育つには何十年もかかっていること、人工林は、「植えるー育てるー伐る（使う）」というサイクルが大切なこと、木でできた製品、できれば地域の木でできた製品をたくさん長く使うことが大切なことを授業のまとめとしました。

子どもたちは、樹木は二酸化炭素を蓄えることができるタンクであり、木を燃やしたり、木が腐ったりしない限り、二酸化炭素を蓄えたままですらわれることを十分理解することができました。授業後の感想からは、「小さな木でも二酸化炭素を蓄えているのがびっくりしました。」「生活の中から出る二酸化炭素の量を少なくするためには、木材や木でできた製品をたくさん長く使うことが大切だと思いました。」「私たちが調べたケヤキの中に 1331 kgの二酸化炭素が蓄えられていると思うと、木は切っても燃やさない方がいいなと思いました。」「これから、僕たちが森を守らなくてはいけない事に気がつきました。」「私はどうにかして二酸化炭素を減らさないとヤバイと思いました。心がけて少し呼吸を減らした方がいいのかなあと、未来が不安でいっぱいです。」「木を切ることがいけないわけじゃないんだなと誤解が解けました。」これらの子どもたちの感想から、二酸化炭素の排出量を減らしたい、樹木を大切にしたいと思う心情を育てることができました。



プログラム概要	
内容	樹木の二酸化炭素固定について
時間	1時間30分
場所	三重大学教育学部附属小学校 理科室及び校庭
対象	6年C組 33人
講師	三重大学教育学部 平山大輔准教授
備考	三重大学教育学部 「学部・附属連携授業」の一貫

副読本「校庭の木を調べよう」のページでは、木の太さ（幹の周囲）を計測したら、早見表を使って、その木の二酸化炭素固定量が調べられるようになっています。また、1人の日本人のくらしを支えるには、測定した木が何本必要かが計算できるようになっています。

